

Title	E. H. エリクソンのジェネレイティヴィティ概念に関する考察 : 1950年代から1960年代前半までの見解の変化
Author(s)	谷村, 千絵
Citation	大阪大学教育学年報. 9 P.21-P.32
Issue Date	2004-03
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/5869
DOI	10.18910/5869
rights	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

E. H. エリクソンのジェネレイティヴィティ概念に関する考察

—1950年代から1960年代前半までの見解の変化—

谷村 千絵

【要旨】

本稿では、1950年代と1960年代前半において、E. H. エリクソンがジェネレイティヴィティ概念を形成した過程を明らかにする。ジェネレイティヴィティは、彼がライフサイクル論において「成人期」を特徴づける心理社会的感覚を表すために造った用語である。1950年から1980年代にかけて彼はこの概念に繰り返し言及しているが、その説明内容は度々変化している。本稿ではとくに、1950年代にエリクソンがフロイト理論を發展させてジェネレイティヴィティ概念を形成し、1960年代前半に世代サイクルといった新しい視点を導入した後、ジェネレイティヴィティ概念の意味内容が飛躍的に増大した過程を明らかにする。この過程でジェネレイティヴィティ概念は、次世代を生物学的に生み出す生殖性だけではなく、精神的な意味において生み出すこととしての教育や、社会進化の契機といった多様な意味を包含するにいたるのである。

第一章 フロイト理論の發展 (1950年代)

ジェネレイティヴィティは、E. H. エリクソン (E. H. Erikson 1902-1994) のライフサイクル論における「成人期」の特徴を示すものである。近年、発達心理学や宗教心理学では、臨床的関心からジェネレイティヴィティ概念に注目する研究が多く見られるが (MacAdams, D. P. & Aubin, Ed de St. 1998 ; Aubin, Ed de St. & MacAdams, D. P. & Kim, T. 2004 ; Kotre, J. 1984 ; やまだようこ2001 ; Yamada, Y. 2004 ; Browning, D. 1978)、本稿では、この概念をエリクソンの理論に即して、その形成過程を明らかにする。本稿では、臨床的関心からではなく、そのような基礎研究の一つとして、1950年代と60年代前半に焦点をあて、エリクソンがこの用語をどのような観点から造り出し、また發展させていったのかという点を詳細に明らかにする。エリクソンの述語は概念定義が曖昧であると指摘されているが(西平直 1993)、とりわけ臨床的関心のもとで行われた研究においては、ジェネレイティヴィティ概念の意味づけがそれぞれの研究者の問題意識を少なからず反映する形となり、そのため共通理解を欠いているといえる。しかし、概念の發展的研究を意義あるものにするためには、基礎的理論研究が不可欠となろう。エリクソンは、1950年から80年代に至るほぼ40年の著作活動において、繰り返しこの概念について考察し、新たな見解を積み重ねていく。ジェネレイティヴィティ概念はライフサイクル論にとって重要な要の概念であるといえるが(谷村1999)、同じライフサイクル論の中のアイデンティティ概念と比較すればさほど注目されたり議論的になってはならず、また、エリクソンの理論發展の過程とこの概念の形成過程がどのように結びついているのかということについての検討は全くなされていないというのが現状である。

第一章では、1950年代のエリクソンの著作の中から、1950年に出版された*Childhood and Society* (邦訳『幼年期と社会』1956)と1959年に出版された*Identity and the Life Cycle* (邦訳『自我同一性』1973)の二つの文献を、さらに第二章では60年代前半の著作の中から、1963年に出版された*Childhood and Society 2nd edition* (邦訳『幼児期と社会』1973)と1964年の*Insight and Responsibility* (邦訳『洞察と責任』1971)の二つの文献を中心に取り上げ、この時期にジェネレイティヴィティがどのように考えられていたのかを見ていく。

第一節 「性器性」から「親密性」へ

彼の最初の著作*Childhood and Society* (1950)には、エリクソンの臨床家としての基本的姿勢や、人間へのまなざしが示されている。エリクソンは、この著作においてフロイトの心理学的理論、とくに幼児性欲理

論を信頼性のある理論として引き継ぐ一方で、フロイトの理論がさらに社会的な視点によって補われる必要があると考え、独自の「心理社会的 (psycho-social)」視座を提示している。そして、人間の人生を8段階に分け、それぞれの段階を「調和傾向 対 失調傾向」の葛藤と危機の相で表し、自我の成長をとらえる心理社会的発達理論を構築した。

さて、周知の通り、フロイトは人間の性のエネルギーに注目した。そして、性の欲望が過度に抑圧されていた当時の人々の不安と怒りを指摘し、そこから人間を解放することに貢献したといえよう。しかしながらフロイトの言説が性の短絡的な強調としてみなされるようになった状況を踏まえ、エリクソンは、成人の発達を本能的な性の適応の問題としてのみとらえることは適切ではないと主張する。そして、「成人初期」における男女パートナー間の性的関係に、次のような心理社会的意味を見出した。

オルガスムのクライマックスの経験を経て、二人の相互調整(mutual regulation)という最高の経験へと至る事実全体によって、男女の対立や、事実と幻想、愛と憎しみの対立などから生じる敵意や潜在的激怒は、なんらかの形で緩和される(Erikson, E.H. 1950, p.230)。

エリクソンは、「成人初期」の男女パートナー間の性的関係に、単に性交がうまくいくということにとどまらない意味を見出し、敵対しやすい二者が各々の「相互調整」によって二項対立を緩和するという、動的な人間関係の原型を見るのである。エリクソンは、こうした人間関係を特徴づける概念として「親密性」を導入する。この「親密性」は必ずしも男女の関係に限られるものではなく、たとえば「親しい友人関係、肉体的な格闘、教師から感化される経験、自己の深みからの直観の経験」などにも、「相互調整」のダイナミズムは通底しているとされる。エリクソンによれば、「オルガスム」や「性的結合」も含めて、「親密性」を達成するためには、相手を(そして自分自身をさえも)受け入れることが前提とされる。エリクソンはこうした前提を「自己放棄(self-abandon)」という言葉で表している。また、これに関して彼は、次のように述べている。

真に二人でいること(true twoness)の条件として、その人がまず自分自身にならなければならない(Erikson, E. H. 1959, p.101)。

すなわち、「成人初期」に「親密性」を達成するための前提は「自己放棄 (self abandon)」であるが、それが可能になるのは「青年期」以降「アイデンティティが申し分ない形で形成途上にある場合に限られる」(Erikson, E. H. 1968a, p.135) ののである。このようにエリクソンは、「性器性」を「アイデンティティ」や「自己放棄」という概念を介して「親密性」の問題へと発展させている。この議論は、本稿で問題とする「成人期」のジェネレイティヴィティの概念にも密接に関連するものである。以下、この点についてより詳細に論じることとする。

第二節 ジェネレイティヴィティ概念の誕生—生殖、そして脱性化

1950年の *Childhood and Society* の中で、エリクソンは「成人期」については重点的に論じておらず、分量にして「成人初期」の半分程度にとどまっている^(*)。少し長くなるが、1950年に初めてジェネレイティヴィティ概念が登場した箇所をここで引用しておきたい。

ジェネレイティヴィティ 対 停滞

「親密性」対 孤独に関する議論に、すでに、かなり核心的な葛藤が含まれていたため、ここでは端的に「ジェネレイティヴィティ 対 停滞」という定式を明示するだけでよいだろう。私は、新しく、分かりにくい用語を造り出したことを謝るが、しかし、創造性や生産性、あるいは他のどのような最新流行型の用語を用いても、次の重要なことを伝えるのは不可能に思われたのだ。つまり、身体的精神的出

会いの中で自分を失う能力(the ability to lose oneself)は、生み出されたもの、責任として受け入れられたものに対する自我の興味拡大とリビドーの供給増大をもたらす、ということである。基本的に、ジェネレイティヴィティは次世代を生み出し導くこと、何であれ親的な責任が付与される専念対象を生み出し導いていくことへの関心である。この豊かな生成の失敗は、ジェネレイティヴィティから退行し、相互反発に際して顕となるような「擬似的親密性」への脅迫的欲求が生じることを意味する。そうした場合には内的な停滞と関係性欠乏の感覚（そして客観的な徴候）が全面的に広がるのである（Erikson, E.H. 1950, p.231.傍点筆者）。

ここでは、ジェネレイティヴィティ概念が、自らの子どもを生み出すこと、すなわち「性器性」がもたらす帰結としての生殖と関連することが示唆されているが、また、「成人期」の心理社会的葛藤がすでに「成人初期」に含まれているとも述べている。具体的にいえば、ここで言及されている「身体的精神的出会いにおいて自分を失う能力」には、「成人初期」の「親密性」のところで問題となっていた「自己放棄(self-abandon)」と通じるところがある。「自分を失う」は文字通りに訳した形だがlose oneselfには英語の慣用語で「没頭する」「専念する」「夢中になる」などの意味もある。引用中にも実際「専念」の語が見られるが、エリクソンは、このように「出会いにおいて自分を失う能力」の形成が背景ないし前提にあることを含意するために、「生産性」や「創造性」というポピュラーな言葉を用いるよりも、generativity という用語を新たに造り出すことを選んだのである。

さらにここでは「身体的精神的出会いの中で自分を失う能力」というように、「精神的」の語が加えられることで、性的連関からの解放の傾向、脱性化が示唆されているといえよう。そう考えるならば、彼がここで、ジェネレイティヴィティの対立項目を、「成人初期」で示した概念を再び用いて、「擬似的親密性」を脅迫的に要求する「停滞感」、「関係性欠乏」として定義していることも理解できる。この「擬似的親密性」は、「成人期」に関連づけていえば、自らが生み出した子どもとの関係において、「自分を失う」ことができないことを意味するといえよう。

ジェネレイティヴィティ概念におけるこうした脱性化の特徴には、フロイトの心理学的理論の枠組みを超えていくエリクソン理論の特徴が現れているともいえる。こうした傾向は、1959年の *Identity and the Life Cycle* (1959; 邦訳『自我同一性』1973)の中で、再び、しかしより拡張された形で現れてくる。たしかにエリクソンは、この著作においても、ジェネレイティヴィティ概念について、次世代との関係における「親密性」の基盤に「性器性」があることを否定せず、「親的な責任」という表現をし、「ジェネレイティヴィティは（「性器性」と遺伝子を介して）次世代を形成することへの関心」(Erikson, E. H. 1959, p.103)であると明確に述べている。しかしながら、エリクソンはここで、ジェネレイティヴィティを「性器性」の帰結として、つまり子どもを産み育てる生殖のみを表す概念として狭く限定することはしていない。

不幸にして親になれなかった人たち、あるいは別の方面に特別な才能をもっている人たちは、子孫ではなく他の形で、親的な責任を専念させるような愛他的な関心や創造性にこの衝動を向ける (Erikson, E. H. 1959, p.103)。

子どもがあるということ、あるいは子どもを望んでいるということさえ、それだけではジェネレイティヴィティの証明にはならない (Erikson, E. H. 1959, p.103)。

つまりここでは、性的必然性からさらに離れて、身体的に生み出すことのみならず、これを超越して精神的にも次世代を生み出すという含意が、ジェネレイティヴィティ概念にあったといえることができるだろう。こうした脱性化—それは同時に脱フロイト化も意味する—の含意は、とくに「自分を失う能力」という精神的な力量の強調において示されているといえよう。

第三節 「相互性」と「世代サイクル」の視点の萌芽

ところで、*Childhood and Society* (1950) の中で提示された「相互性(mutuality)」の概念についても述べておけなければならない。この概念は、ジェネレイティヴィティとは関係ない章において述べられたもので、児童精神分析家として臨床に携わったエリクソンが、親子関係の相互形成的な側面を示すために用いた概念である。

赤ん坊は家族からコントロールされると同時に、その家族をコントロールし育てている。事実、家族は赤ん坊によって育てられながら、赤ん坊を育てているといえよう。(Erikson, E. H. 1950, p.65)。

このような、親が子どもを一方向的に育てるだけでなく、子どもによって親が育てられるという視点に基づく「相互性」の概念は、60年代においてジェネレイティヴィティ概念と関連づけられ、概念の内容発展を把握するのに極めて重要な鍵となる。

また、エリクソンは1959年に「成人期にジェネレイティヴィティが発達しない理由」について述べた箇所で、次のような考察を展開している。

事実、児童相談にくる若い親たちの大多数が、この段階で発達すべき能力 [ジェネレイティヴィティ] の遅滞や欠乏に悩まされているようだ。原因は、幼児期初期の漠然とした記憶の中に見出されることが多い。無理やり自己形成したパーソナリティに根をもつ過剰な自己愛に、そして、最終的には(ここではじめに戻るようになるが)一つの信頼である「種への信頼」、つまり、共同体の中で自分が歓迎されており、信頼される存在であると子どもが確信するような信頼の欠如に見出されるのである (Erikson, E. H. 1959, p.103. 括弧内は筆者)。

ここでエリクソンがジェネレイティヴィティの未発達の理由として指摘しているのは、ライフサイクルの「乳児期」において獲得される「基本的信頼感」の欠如である。ジェネレイティヴィティは「基本的信頼感」の上に世界と自分とを素朴に受容し、出会いを可能にする姿勢において発達するととらえられているといえよう。そして、「基本的信頼感」は先行世代と次世代の「相互性」において生み出されるものであるという点で、ここには60年代になってジェネレイティヴィティ概念の内容発展に大きな影響を与える「世代サイクル」の視点の萌芽が見られるといえよう。

第二章 世代サイクルと社会進化の要としてのジェネレイティヴィティ (1960年代前半)

第一節 必要とされることを必要とする

1963年に *Childhood and Society* (1963; 邦訳『幼児期と社会』1973) の改訂版が出版された。全体の構成は初版と同じであるが、第七章「人間の8つの段階」における「成人期」の分量は劇的に増え、内容に関してもかなり変化している。よって以下では、初版との比較からジェネレイティヴィティ概念の変化を追ってみたい。まず「成人期」の節の冒頭には次のような文章が加えられている。

本書は幼児期に重点をおいているが、そうでなければジェネレイティヴィティの章が中心になったに違いない。この用語は、人間を、学習するだけでなく、教え、組織を作る存在にしてきた重要な進化的発達を包含しているからだ。最近では、子どもが大人に依存していることをドラマチックに表現する主張があるが、そのことによって年上の世代が若い世代に依存している事実が隠されてしまっている。成熟した人間は、必要とされることを必要とする。成熟は、生み出され、世話をされなければならないものから勇気づけと同じく、導きをも必要とするのである (Erikson, E. H. 1963, pp.266-267)。

この冒頭の一節には、重要な見解が凝縮されている。第一に、改訂版では、成人が「必要とされること

を必要とする」と述べられているように、幼い世代と先行世代とが相互依存、相互形成の関係にあるということがより明瞭に主張されている。前述したように、大人と子どもの相互形成的な関係、とりわけ親子の「相互性」については、すでに1950年の初版においても触れられていたが、改訂版において初めて「相互性」の視点がジェネレイティヴィティと結びつけられ、「成人期」を考察する際の鍵として位置づけられるようになっている。第二に、このことは、世代サイクルという視座、そして異世代間の「相互性」による、人間の強さの発達、すなわち「徳 (virtue)」の発達の明示化という新しい理論展開を方向づけることになる。第三に、*Childhood and Society* の初版では、人間の幼児期と社会様態との関係が考察の対象になっていたのに対して、改訂版ではエリクソンの思索がさらに発展し、教える存在としての人間、「成人」がその中心的テーマになりつつあることが示されている。さらに、これとの関連で、このようなジェネレイティヴィティが人間の「進化的発達」を意味するものとしてとらえなおされていることにも注目しておきたい。後に述べるが、エリクソンはこの時期から、ジェネレイティヴィティに関して社会進化論的、プラグマティズム的、あるいは優生学的ともいえる主張をはじめるのである。以下、これらの三点について順番に詳細に見てみることにしよう。

まずは、「相互性」の視点から見てみよう。このテーマは、1963年の改訂版での先の引用に示されているように「必要とされることを必要とする」という言葉で、初めてジェネレイティヴィティに関連するものとして定義される。この点については、1964年の著作 *Insight and Responsibility* (邦訳『洞察と責任』1971) でも、次のように述べられている。

大人の人間は、必要とされることを必要とする。人間は、自分が生み出してきたもの、今は「育てられ」、保護されているもの、そして、やがて自分を乗り越えてゆくものから発せられる挑戦を必要とする。なぜなら、それは人間の自我の強さのためであり、また、彼の所属する共同体の強さのためだからである (Erikson, E. H. 1964, p.131)。

ここでもジェネレイティヴィティは、先行世代から「必要とされること」として定義され、しかもそれが成人個人にとって「必要」であるのみならず、社会にとっても「乗り越え」のために必要であることが示されている。後者については第三節で論じるが、エリクソンは、前者、すなわちジェネレイティヴィティが成人世代にとって有する重要性については次のように述べている。

ひとたび人間の人生諸段階の相互運動を把握するなら、我々は成人が「必要とされることを必要とする」ようにできていると、理解できるだろう。それは、人間が自分自身をペットや子どものように扱うようになる自己耽溺という精神のゆがみを避けるためである。だから、私は本能的で心理社会的なジェネレイティヴィティの段階を、「性器性」を越えるものとして提示したのであった (Erikson, E. H. 1964, p.130)。

エリクソンが、成人は「必要とされることを必要とする」という理由は、成人個人が「成人期」という発達段階において、その時期独特の「強さ」を獲得するためである。それに失敗した場合、成人は、「自己耽溺」に陥るとされている。つまり、これは「出会いにおいて自分を失う能力」を達成できないために「親密性」によって特徴づけられるような他者との関係を築くことができないこと、「擬似的親密性」ととどまることを意味しているのである。これに対応して、改訂版の「成人初期」に関する箇所でも「親密性」について次のような見解が付与されている。

二人の孤独 (*isolation à deux*) (*ii) といいうるパートナーシップもあるが、それは次の重大な発達 (*critical development*) —つまりジェネレイティヴィティの発達に直面する必要から二人を遠ざけることになる (Erikson, E. H. 1963, p.266)。

ここでは、性的連関とその帰結としての生殖という文脈はほとんど完全に背後に退き、むしろ、教える

こと等の対人関係スキルの発達条件としての「親密性」に重点が移動しているといえてよい。「出会いにおいて自分を失うこと」は、成人としての発達の可否を左右する重要な項目になっている。ここでエリクソンが挙げている「二人の孤独」は、お互いの甘えあいを許しあう閉じた関係であると推定できるが、そうした関係に甘んじているのは、ジェネレイティヴィティの発達に直面できないとエリクソンは断言しているのである。

一方、ジェネレイティヴィティにとって不可欠な「自分を失う能力」は、真の「親密性」に支えられているだけではなく、「相互性」の中で引き出されるものでもある、というのがエリクソンの見解であろう。エリクソンは、晩年に「私たちみな親しく交わるようにさせる基本的な条件は、生まれたばかりの子どもがもつ飾りなき(nakedness)と無力さである」(Erikson, E. H. 1974, pp.81-82)とも述べているが、彼のこうした基本的見解は、「出会いにおいて自分を失う能力」を、丸裸で自分を必要とする他者によって引き出されるものとしても位置づけていることを意味しよう。そうした無力な相手との間に「相互性」を築こうとする場合、まず不可欠なのがその関係に自分を投げ出すこと、「自分を失うこと」だということである。

第二節 世代サイクルと徳の形成

このような展開は、この時期から現れてくるエリクソンの新たな視座の枠内に位置づけることによってよりよく理解される。すなわち、「世代サイクル」という視点である。日本におけるエリクソン研究では、すでに柳沢昌一(1985)が60年代前半の「世代サイクル」の視点の導入とそれに伴うエリクソンの思想的転回を指摘している。柳沢は、「60年代前半、エリクソンは相互性の視点を基盤として<世代サイクル>の視点を指定し、「成人期」の意味をとらえ返すに至っている」(柳沢昌一 1985, p.397)と指摘している。柳沢が指摘するように「世代サイクル」という用語が初めて登場するのは、1964年の *Insight and Responsibility* (1964; 邦訳『洞察と責任』1971) においてである。このなかでエリクソンは、心理社会的発達を推し進めている人間個人の内的な力を「人間の強さ(human strength)」あるいは「徳(virtue)」として定式化して考察し、それらが葛藤の解決から生じるものであると同時に、異世代の相互形成的な関係の中で発達するものだという洞察を示した。それでは、エリクソンのいう「徳(virtue)」とは、具体的にどのようなことを示すのだろうか。エリクソンは、自らの臨床経験から、患者が自己を再構成し、新しい段階に進んでゆく回復力にその力を見出している。

我々にとって、患者が回復してきたことを知るのもっともうれしい瞬間だ。ただ、それは、一質問紙でいうような、顕著な変化、やや変化というようなことではなく一本質的な変化が見られている場合である。つまり、症状が消失したというのは、次の段階へのプロセスに過ぎない。決定的な変化の基準とは、患者に強さの増大が見られることであり、愛情関係であれ、仕事であれ、あるいは家庭生活や友人関係であれ、社会人生活においてであれ、正しいと考えられる目的を集中して追求できる力を保有しているということである(Erikson, E. H. 1964, pp.111-112)。

ここで、エリクソンが人間の強さと見ているものは、社会への能動的働きかけとして表れるものといえよう。人間を生きさせる活力としてのそうした強さを、エリクソンは各人生段階における心理社会的危機を乗り越える「徳(virtue)」として規定する。そして、「希望」(「乳児期」)、「自律性」(「幼児期初期」)、「自主性」(「遊戯期」)、「勤勉性」(「学童期」)、「誠実」(「青年期」)、「愛」(「成人初期」)、「ケア」(「成人期」)、「英知」(「老年期」)という徳を提示するのである。さて、ジェネレイティヴィティと直接的に関連する「成人期」の「徳」は、「ケア(care)」であるとされる。

ケアは、愛や、必然や、あるいは偶然によって生み出されたものに対する、広がり続ける関心(concern)である。ケアは、放棄できない義務感に伴うアンビヴァレンスを克服する(Erikson, E. H. 1964, p.131)。

ケアという語はもともと「懸念」、「心配」、「気苦労」、「憂慮」などを表すが、エリクソンはケアを、心配や憂慮などの消極的な意味に限定せず、「義務感に伴うアンビヴァレンスを克服する」前向きな力として、「肯定的な意味合い」においてとらえなおしている^(*)。

また、ここでエリクソンは、ジェネレイティヴィティが、愛によるものであろうと、必要によるものであろうと、あるいは偶然によるものであろうと、いずれにせよ自らが生み出したものとの間で生起するものであることを示唆している。そうしたものは、義務やアンビヴァレンスをもたらすが、それらを含めて「ジェネレイティヴィティ 対 停滞」の葛藤を受容する成人の心理社会的強さとして、ケアは提示されているのである。エリクソンは、また、この「ケア」の「徳」は、異世代の相互形成的な関係の中で発達することを強調している。ここで「世代サイクル」という新たな視点が展開されるのである。

徳は、各世代が組織の中で共に生きる時、重なり合う世代の相互交渉の中で発達する。共に生きるということは偶然のつながり以上のものである。個人の人生の段階は、他者の段階と連動して「相互に生きて」おり、歯車のように噛み合いながら進みゆくものである(Erikson, E. H. 1964, p.114)。

幼児期と成人期の段階が歯車のように噛み合うことは、まさに世代の形成と再形成のシステムである(Erikson, E. H. 1964, p.152)。

ここにおいて、すでに1950年の著作に登場していた「相互性」の概念が、明確に、二つの世代における発達を進めていく共通の契機として示されている。そして、そのことと関連して、「幼児期」の重要性についてエリクソンは次のように述べている。

人間には長くて重要な幼児期があるが、家族や共同体に連なる子孫のそれぞれの幼児期に、人間だけが気遣い(solicitude)を押し広げることができ、またそうしなければならない。子どもの具体的な経験に意味を与え、言葉を教えるときには文字通りの意味を超えた論理を伝え、自分の世界像と仲間の様式の輪郭をだんだんと明確に示していくことで、人間は子どもに希望、意志、目的、適格の萌芽を伝達するのである(Erikson, E. H. 1964, p.130)。

人間の幼児期が長いことは、一般的には、人間が教育されることを必要とする種であることの論拠となっている。しかしながら、ここでエリクソンが指摘するのは、それゆえ人間はまた、長い幼児期を生きる次世代を同様に長い間「教育する」種でもあるということだ。「成人期」と「幼児期」は、二つの世代の歯車が噛み合う箇所である。そして、そうした成人の長期にわたる次世代との取り組みとしてのジェネレイティヴィティのなかに、次世代が調和的傾向と失調的傾向との葛藤のなかで「希望」、「意志」、「目的」、「適格」などの「徳」を形成し、それと同時に成人自身が「ケア」の徳を育てていく契機を見るのである。こうした意味で、「成人期」におけるジェネレイティヴィティは、「相互性」の、すなわち世代サイクルの要として明瞭に位置づけられているといえよう。

第三節 教える種—社会進化論的傾向

Childhood and Society の初版(1950)では、成人期の調和的傾向を示す用語として、生産性や創造性はふさわしくないと退けられていた。しかし、1963年の改訂版では、「ジェネレイティヴィティ概念は、生産性や創造性といったよりポピュラーな類義語で置き換えることはできないが、実際、それらを含意している」(Erikson, E. H. 1963, p.267)と述べられている。上述のように脱性化の傾向が明瞭に打ち出されることに伴い、ジェネレイティヴィティ概念は、単なる生殖を超えて一般に「生み出すこと」ととらえられた。それと同時に、改訂版ではエリクソンはジェネレイティヴィティが人間を「教える種」にしたと述べ、社会進化論的方向を示している。「教えること」について彼は次のように述べている。

人は教えることを必要とする。それは、教えられることが必要な者のためだけでなく、また彼自身の「アイデンティティ」を満足させるためだけでもない。事実は語られることによって、論理は証明されることによって、真理は明らかにされることによって、生き続けるからである (Erikson, E. H. 1964, p.131)。

なぜ、人は教えることが必要とするのか。それを必要としているものが目の前におり、そうすることが自分の「アイデンティティ」に合うからという以上に、人から人へと事実が語りなおされ、論理が証明しなおされ、真実が明らかにしなおされるそのサイクルの中で、はじめて事実や論理や真実が存続し続けるからである。事実や論理、真実そのものに普遍的な価値があるのではない。これらは、ジェネレイティヴィティにおいて、すなわち、先行世代が後続世代に対して、事実を語りなおし、証明しなおし、明らかにしなおしてプロセスの中ではじめて価値をもち、ひいては心理社会的進化を支えるものであると考えられているのである。

1960年代前半に書かれた著作の中では、次世代の中に、そしてそれと同時に自らのうちに「徳」を育んでいくという構造が提示されている。しかしここではさらに、「事実」、「論理」、「真理」の再構成について、知識論的ないし学問論的視座とでも呼べるようなものが新たに加えられている。ここでは、成人個人の発達という枠組みを超えて、社会の発展、進化が、とくに知識論的、学問論的視座と結びつけられている点では、プラグマティズムの学問論に通じるところもあるといえよう。

第四節 優生学的展開のアイロニー

ところで、*Insight and Responsibility* (1964; 邦訳『洞察と責任』1971) では、ジェネレイティヴィティの要素の一つである「生殖性」に関して、次のような新しい見解も示されている。

豊かな生殖能力を制限しなければならない現代人は、生殖に伴う問題が、受胎の意識的な選択を可能にする技術の力によって解決したと考えるようになってきている。そのような選択をする場合、人間には準備ができていなければならない。もし、これまでの極めて「安全な」愛の生活が、単に子どもを生むことを避け、ジェネレイティヴィティを拒否することになるなら、ちょうど性欲自体の否定がそうであったのと同様に極度の内的緊張の原因になりえる。この場合、しばしば「創造の火」を弄しているという特別の罪悪感が生じる。したがって生殖性(procreation)の制御は、人間の心理的欲求の知識に照らして導かれるだけでなく、計画的にこの世に生み出された人間全てに向けられた生成的責任(generative responsibility)という普遍的な感覚にたって導かれることが必須である。このことは、我々が描いているような発達の機会を(避妊具と食物の問題を超えて)共同で、ひとりひとりの子どもに保証することを含んでいる (Erikson, E. H. 1964, p.132)。

現代人における「生殖性」の抑圧は、技術主義、効率主義が邁進する20世紀のアメリカ社会における精神分析家の使命として、エリクソンがその後20年にわたって主張することになる見解である。「生殖性」の抑圧の真偽の検証はさておき^(*)、ここでは、産児制限を認め、この抑圧の合理的な解決を図るために彼が主張する、「選ばれた命に最良の環境を提供する」という優生学的な発想に注目したい。

生殖と産児制限に関するこのようなエリクソンの見解には、特定の社会にとって適応的でない時期に生じた命、あるいは適応的でない性質をもった命を選別するという社会様式(モード)に対する現状肯定的な態度が見られる。付言するなら、近年明らかにされた事実によればエリクソンは障害をもって生まれた四番目の子どもを、誕生後すぐに施設に入れて世間に公表せず、ほとんど養育を拒否していたという (Friedman, L. J. 1999, pp.208-215)。そうしたことも、このような見解と関連しているのかもしれない。

ジェネレイティヴィティを「計画的にこの世に生み出されたものに対する普遍的ジェネレイティヴィティ」として合理化する素朴な優生学的、進歩主義的発想には、大人優位、そして健康者優位の近代的志向を読みとることもできるだろう。このように計画的に富むジェネレイティヴィティを、エリクソンは「人

間を教え育てる存在にまでしてきた進化的発達」(Erikson, E. H. 1963, p.266)を約束するものとしてとらえたのであった。この点で彼はジェネレイティヴィティに関して楽観的な進歩主義者である。エリクソンは、出会いにおいて「自分を失う能力」によって生み出すことがジェネレイティヴィティであると主張し、「愛や、必然や、偶然によって生み出されたものへの関心」が「ケア」であると述べてきた。しかしながら、ここでは、成人世代の計画的生殖は、出会いの本質的要素である「偶然性」を排除するものであることが看過されているといえよう。このことは、それまでの彼のジェネレイティヴィティ概念の内容を多きく変化させるものだが、エリクソン自身はそれに無自覚であったようである。

以上、1950年代においてフロイトの心理学的理論を継承しつつ、その枠組みを脱していく過程においてジェネレイティヴィティ概念が構想されたこと、さらに1960年代に入って、「世代サイクル」ないし「ライフサイクル」の視座が導入されたことに伴い、ジェネレイティヴィティ概念の意味内容が明瞭化し深化していったことが明らかになった。この「世代サイクル」ないし「ライフサイクル」のパースペクティブのもとでは、ジェネレイティヴィティ概念は、異世代関係の「相互性」、相互形成的関係の要として位置づけられた。さらに、そうしたエリクソンの理論展開の中に、社会進化論的あるいはプラグマティズム的と呼べるような傾向、さらには優生学的傾向が見られることも明らかになった。

1950年代から1960年代前半までのエリクソン理論におけるジェネレイティヴィティ概念の展開は、基本的にはこの概念内容の継続的な発展および深化として特徴づけることができるだろう。その後、60年代後半に、エリクソンは社会的・歴史的・文化的文脈をさらに重視すべく「儀式化」という概念を導入するが、1969年の著作の *Gandhi's Truth* を境にして、それまでの考察が錯綜しはじめる。その傾向はやがて、1970年代および1980年代におけるジェネレイティヴィティ概念の内容的分裂へと展開していくのである。「儀式化」ならびに *Gandhi's Truth* 以降、70年代、80年代のジェネレイティヴィティ概念の形成過程については、稿を改めて考察する必要がある。それらの時代のジェネレイティヴィティ概念に関する内容の推移や、力点の変化などを明確にとらえるためにも、本稿で明らかにした50年代、60年代前半の概念形成の過程は、エリクソンが成人の自我発達として、基本的にどのようなことをとらえようとしたのかということを実に示しているといえるだろう。

【注】

- i) *Childhood and Society* (1950; 邦訳『幼年期と社会』1956) が公表される以前、ジェネレイティヴィティの段階を除く7つの段階がすでに考案されていた。エリクソンの妻ジョアンの回顧によると、彼らはドライブ中の車の中で「成人期」の段階を思いついた。彼らは、シェイクスピアの描いた人生段階に「遊戯期 (play age)」が抜け落ちていることを話していて、自分たちの理論に自分たちのいる重要な段階が一つ抜けていたことに気がついた、という。
- ii) 仏語 *ca deux* は、「二人の」、「二人による」、「二人のための」という意味にも読める。
- iii) なお、エリクソンのケア概念は、従来「世話」や「はぐくみ」と訳され、または「ケア」と表記されてきた。本研究においては、「ケア」という訳語を当てたい。エリクソンのケア概念について考察した拙稿(2000)では、この概念の訳語の問題に触れ、エリクソンのケア概念は、成人が「自己へのまなざし」と「他者への関心」を交差されるところにこそ生じるものであるとして、「配慮」と訳すことを主張した。しかしながら、これは、エリクソンが精神分析の手法によって「自己観察的になることによって思慮分別を身につける」ことを「啓蒙」と呼んでいた (Erikson, E. H. 1963, Chapter 11) こととの概念的混同の結果導かれた解釈であったといえる。エリクソンのテキストから、そうした解釈をすることは可能であるが、一面的であったといわざるを得ない。本稿では、訳語を改め、ケアというカタカナ表記を用いることにした。ケアという概念は、近年、エリクソンのテキスト以外で、教育学などの臨床科学において新たに注目されている (Noddings, N. 1984, Mayeroff, M. 1971, Gilligan, C. 1982, 広井良典1997, 鷲田清一1999など)。これらの議論においてこの語を「ケア」と訳すことはほぼ定着している。また基本的にこの語を「関心」ととらえる点では、エリクソンの用語としての *care* もそれらの議論との共通基盤をもつと判断し、本稿においてもカタカナ表記をとることにした。
- iv) エリクソンは一貫して生殖性の抑圧と昇華というこの主張を繰り返す。このことによって彼に対しては保守的であるとの批判が寄せられた。しかし、実際に抑圧の有無を調べる調査が行われたことに対

して、エリクソンはインタビュー論文の中で論駁を加えている。それによると、彼は精神分析家として、文化の変化に伴い、現代人の無意識の中にあると見て取った抑圧を語ったのであって、その抑圧を意識して感じている人がどれくらいいるかという調査は意味がないということ、そしてまた、こうした問題を把握しておくことは臨床家の努めであって、一般的な啓蒙をうながすものではないと主張している (Erikson, E. H. 1981, p.263)。

<参考文献>

- Aubin, Ed de St. & MacAdams, D. P. & Kim, T. 2004 *the Generative Society*, American Psychological Association
- Browning, D. 1978 *A Normative Image of Man, Childhood and Selfhood*, Associated University Press
- Emmons, R. A. 1999 *The Psychology of Ultimate Concerns: Motivation and Spirituality in Personality*, The Guilford Press
- Erikson, E. H. 1950 *Childhood and Society*, W. W. Norton, 草野栄三良訳『幼年期と社会』日本教文社1956
- Erikson, E. H. 1959 *Identity and The Life Cycle*, W. W. Norton, 小此木啓吾訳『自我同一性』誠信書房1973
- Erikson, E. H. 1963 *Childhood and Society* (2nd Ed), W. W. Norton, 仁科弥生訳『幼児期と社会』みすず書房1973
- Erikson, E. H. 1964 *Insight and Responsibility*, W. W. Norton, 鐘幹八郎訳『洞察と責任』誠信書房1971
- Erikson, E. H. 1974 *Dimensions of a New Identity*, W. W. Norton, 五十嵐武士訳『歴史の中のアイデンティティ ジェフアソンと現代』みすず書房1979
- Erikson, E.H. 1980 *On the Generational Cycle*, *International Journal of Psychological Analysis*, Vol.61, pp.213-223.
- Erikson, E.H. & Eriksson, M. 1997 *The Life Cycle Completed: Extended Version*, W. W. Norton, 村瀬孝雄・近藤郁夫訳『ライフサイクル、その完結<増補版>』みすず書房2001
- Friedman, L. J. 1999 *Identity's Architect*, Scribner, やまだようこ・西平直監訳『エリクソンの人生 上・下』新曜社2003
- Gilligan, C. 1982 *In a Different Voice: Psychological Theory and Women's Development*, Harvard University Press, 生田久美子他 訳『もうひとつの声』川島書店1986
- 広井良典 1997『ケアを問いなおす—<深層の時間>と高齢化社会』筑摩書房
- Kotre, J. 1984 *Outliving the Self*, W. W. Norton
- MacAdams, D. P. & Aubin, Ed de St. 1998 *Generativity and Adult Development*, American Psychological Association
- MacAdams, D. P. & Logan, R. L. 2004 *What is Generativity? The Generative Society*, Aubin, Ed de St. & MacAdams, D. P. & Kim, T., American Psychological Association
- Mayeroff, M. 1971 *On Caring*, Harper & Row, 田村真・向野宣之 訳『ケアの本質—生きることの意味』ゆみる出版1987
- 西平直 1993『エリクソンの人間学』東京大学出版会
- Noddings, N. 1984 *Caring: A Feminine Approach to Ethics & Moral Education*, University of California Press, 立山善康他 訳『ケアリング』見洋書房
- 谷村千絵 1999「E.H.エリクソンのジェネレイティヴィティ概念に関する考察—ライフサイクルとかかわりのダイナミズム—」『教育哲学研究』教育哲学会 第80号, pp.48-63.
- 谷村千絵 2000「E.H.エリクソンの<care>概念に関する考察—他者への関心と自己へのまなざし—」『大阪大学教育学年報』大阪大学人間科学部教育学研究室 第5号, pp.1-13.
- 鷺田清一 1999『「聴く」ことの力—臨床的哲学試論』TBSプラタニカ
- やまだようこ 1999「喪失と生成のライフストーリー」『発達』第79号、ミネルヴァ書房
- やまだようこ 2000『人生を物語る』ミネルヴァ書房
- やまだようこ 2001「エリクソンの子どもたちと生成継承性」『教育学年報8 子どもの問題』世織書房
- Yamada, Y. 2004 *The Generative Life Cycle Model: Integration of Japanese Folk Images and Generativity*, *The Generative Society*, Aubin, Ed de St. & MacAdams, D. P. & Kim, T. American Psychological Association, pp. 97-112.
- 柳沢昌一 1985「E.H.エリクソンの心理社会的発達理論における「世代サイクル」の視点」『教育学研究』第52巻第4号, pp.396-406.

E. H. Erikson's Concept of Generativity, Reconsidered : Through the Changing Views from 1950's to Early 1960's

TANIMURA Chie

This paper makes clear the process through which E. H. Erikson constructed the concept of generativity from 1950's to early 1960's. The concept of generativity means the "psycho-social" sense of adulthood in his theory of life cycle. Since 1950 to 1980's, Erikson mentioned on this concept again and again, and shifted the point of explanation gradually. This paper gives light to the roots of his thought about generativity in 1950's and pays attention to his consideration especially in the early 1960's. This paper finds out the process which Erikson coined this concept came from S. Freud's psycho-sexual theory and expanded it to the social context and he expanded the meaning of this concept by incorporating a new perspective of human generational cycle. In this process generativity came to mean not only procreativity which gives birth the next generation biologically, but also teaching which generates in the sense of spiritually and Erikson thought of it as a moment of progress or development of society.

